

# アブラツノザメ 日本周辺

North Pacific Spiny Dogfish, *Squalus suckleyi*

## 管理・関係機関

なし

## 最近の動き

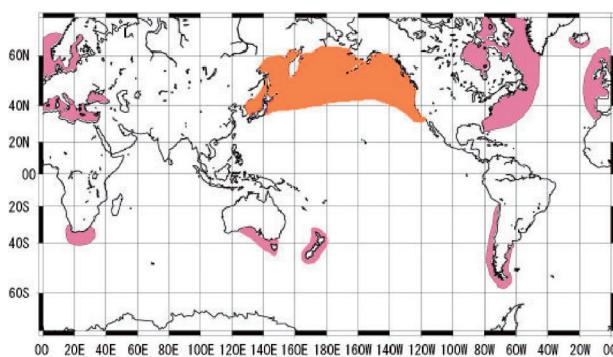
2015 年の我が国周辺のアブラツノザメの推定漁獲量は 3,400 トンであり、近年の漁獲量は横ばい傾向で推移している。沖合底びき網漁業（以下、沖底）及び底はえ縄漁業の標準化 CPUE は近年増加傾向にあり、アブラツノザメの主分布域である津軽海峡周辺では資源の増加傾向が認められる。

## 生物学的特性

- 体長・体重：雌：全長 120 cm・13 kg、  
雄：全長 95 cm・4 kg
- 寿命：60 歳以上
- 成熟開始年齢：雌 23 歳、雄 14 歳
- 繁殖期・繁殖場：2～5 月、繁殖場は調査中
- 索餌期・索餌場：調査中
- 食性：魚類、頭足類
- 捕食者：東北地方太平洋岸沖のマダラの胃内容物として出現

## 利用・用途

第 2 次世界大戦前後は、ビタミン A、肝油の原料としてかなりの需要があったが、合成ビタミン A の普及によりアブラツノザメ漁業は衰退した。東北地方では刺身や煮物、照り焼きなどで食されるほか、ちくわ等の練り製品原料として利用される。また、近年、肝油やサメ軟骨エキスなど健康補助食品の原料の一つになっている。



アブラツノザメ類の分布（阿部 1986 を改変）  
オレンジ色 : *Squalus suckleyi*、ピンク色 : *S. acanthias*

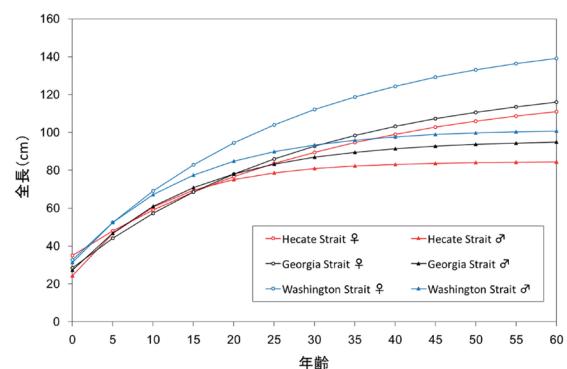
## 漁業の特徴

北日本の太平洋側や日本海側では、かなり古い時代から漁獲されていたが、漁獲対象として注目されたようになったのは明治 30 年代末頃からであり、北海道、青森、秋田、石川県などで当初はマダラなどを対象とした底はえ縄漁船の兼業対象種として漁獲された。その後、昭和初期に機船底びき網で漁獲されるようになった。太平洋戦争後は食糧増産政策に伴い主に機船底びき網により積極的に漁獲され、漁獲量が増加した。その後、本種の漁獲量は、1950～1960 年代の合成ビタミン A の普及による国際取引の減少とそれに伴う魚種単価の下落により急激に減少した。現在、本種の主な漁獲は、以前に比べて同種を主対象とした操業が減少した沖底と本種を漁獲対象とする底はえ縄漁業により行われており、さめ類全体の漁獲量より推定した本種の漁獲量は 1990 年以降 2,900～4,600 トンで比較的安定して推移している。

## 漁獲の動向

資源状態の指標値として、1972 年以降の沖底漁獲成績報告書から集計した太平洋北区のかけまわし（1 そうびき沖底）の CPUE と、主要な漁場である津軽海峡周辺における 1979 年以降の青森県の底はえ縄による漁獲量及び延べ操業隻数から求めた CPUE を用い、資源の動向を検討した。

太平洋北区においてアブラツノザメの漁獲が多いのは襟裳西～尻屋崎海区で操業する青森県のかけまわしである。近年のかけまわしによる CPUE は 2000 年代前半の約 150% 程度、分布域の中心にある津軽海峡内の底はえ縄でも近年の CPUE が 2000 年代前半の約 150% の水準を示しており、本資源は 2000 年代中頃から明確な回復傾向にあると考えられる。さらに、底はえ縄の 1979～2014 年のノミナル CPUE（標準化されていない CPUE）は、1954～1956 年に比べて高い水準にある。

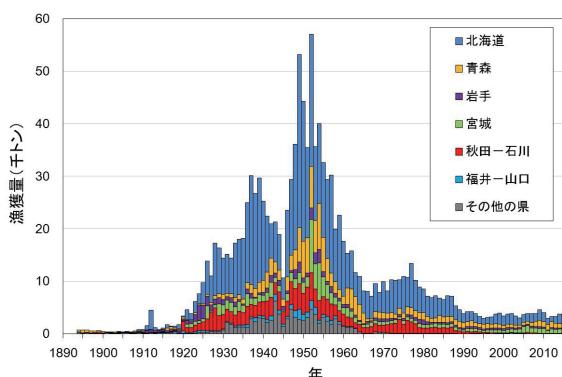


カナダ西岸のアブラツノザメの雌雄別海域別年齢－全長関係  
(Ketchen 1975 より作成)

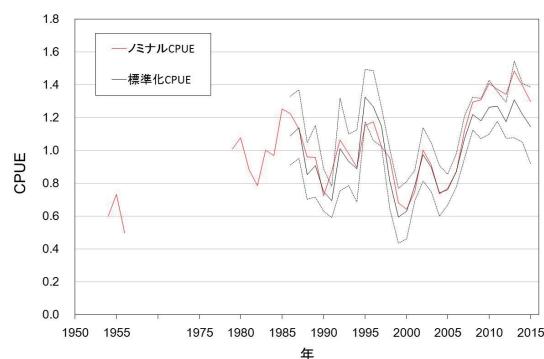
資源状態	資源状態のまとめ
<p>日本周辺海域において本種の分布の中心に近いと想定される津軽海峡内で本種を漁獲する底はえ網漁業の CPUE 及び太平洋北区のかけまわしの CPUE の解析結果、及び過去の漁業の歴史や歴史的な推定漁獲量のトレンドから総合的に判断すると、本資源は悪い状態にあるとは言えず、比較的安定しており、2004 年以降は増加傾向にあると判断される。また、現在の漁獲量水準は持続可能であると判断される。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>■本資源は比較的安定しており、2004 年以降は増加傾向にある。</li> <li>■現在の漁獲量水準は持続可能と判断される。</li> </ul>

管理方策	アブラツノザメ（日本周辺）の資源の現況（要約表）										
	<table border="1"> <tr> <td>資源水準</td><td>悪い水準ではない</td></tr> <tr> <td>資源動向</td><td>増加</td></tr> <tr> <td>我が国の漁獲量 (最近 5 年間)</td><td>2,905 ~ 3,742 トン※ 最近（2015）年：3,390 トン 平均：3,346 トン（2011 ~ 2015 年） (近年の漁獲量は持続可能)</td></tr> <tr> <td>最新の資源評価年</td><td>—</td></tr> <tr> <td>次回の資源評価年</td><td>—</td></tr> </table>	資源水準	悪い水準ではない	資源動向	増加	我が国の漁獲量 (最近 5 年間)	2,905 ~ 3,742 トン※ 最近（2015）年：3,390 トン 平均：3,346 トン（2011 ~ 2015 年） (近年の漁獲量は持続可能)	最新の資源評価年	—	次回の資源評価年	—
資源水準	悪い水準ではない										
資源動向	増加										
我が国の漁獲量 (最近 5 年間)	2,905 ~ 3,742 トン※ 最近（2015）年：3,390 トン 平均：3,346 トン（2011 ~ 2015 年） (近年の漁獲量は持続可能)										
最新の資源評価年	—										
次回の資源評価年	—										
<p>津軽海峡で操業を行う底はえ網漁業者は、小型魚や出産への貢献度が高いと考えられる高齢魚を再放流しており、さらに、漁獲量の上限を設定するなど、資源保全に向けた取組を行っている。なお、2007 年のワシントン条約第 14 回締約国会議及び 2010 年の第 15 回締約国会議では、EU から附属書 II への掲載が提案されたが採択されず、その後掲載提案は行われていない。</p>											

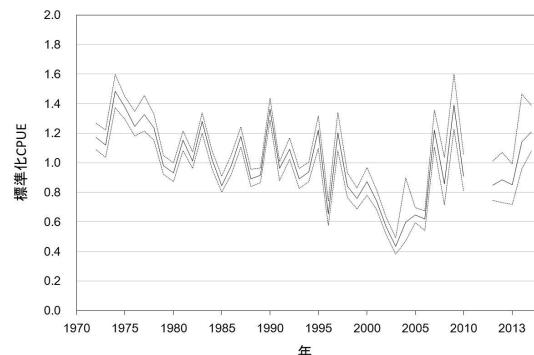
※漁獲量は全国のさめ類漁獲量と過去のさめ類に占めるアブラツノザメの平均的な割合から推定した値（2015 年は暫定値）



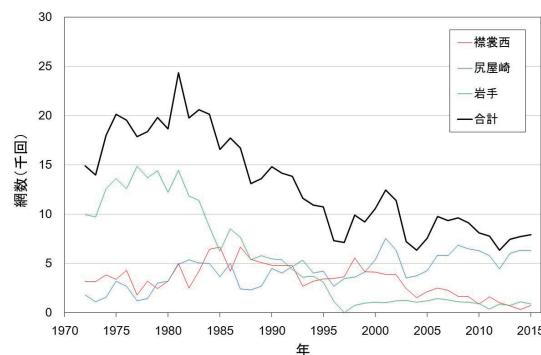
さめ類漁獲量から推定したアブラツノザメの漁獲量



津軽海峡内で操業を行う底はえ網のノミナル CPUE（標準化されていない CPUE）と標準化 CPUE（各 CPUE は 1 が平均値となるように基準化、破線は 95% 信頼区間の上限値と下限値）



太平洋北区における沖底（かけまわし漁法）の標準化 CPUE  
(標準化 CPUE は 1 が平均値となるように基準化、破線は 95% 信頼区間の上限値と下限値)



太平洋北区における沖底（かけまわし漁法）の有漁網数（アブラツノザメが漁獲された操業日の網数）の推移